『和荘兵衛』と『ガリバー旅行記』

常盤井礼十

W. A. エディは『和荘兵衛』をチェンバレンの英訳で読み[1]，『ガリバー旅行記』との類似点に注目し，両書の関係を推測している[2]．彼は『ガリバー旅行記』第三編のストラルドブラグ（不死人）と『和荘兵衛』の不死国との類似から，両書の影響関係を推測している．その根拠の一つは，ストラルドブラグの住んでいるラグナグに関する，ガリバーの次の説明である．

> There is indeed a perpetual commerce between this kingdom and the great empire of Japan, and it is very probable that the Japanese authors may have given some account of the *struldbrugs* . . . .[3]

しかし，『和荘兵衛』の出版は前編が安永三年（1774年），後編はその五年後であり，一方『ガリバー旅行記』の初版はそれより約五十年前の1726年に出版されている．そのためエディはストラルドブラグと不死国との関係は，相互の影響関係ではなく，両者共に同じ源から影響を受けたのではないかと推定している．彼はその裏付けとして，カリフォルニア大学のある日本人学者との交通によって，不死人の物語は二千年前の中国人の哲学者の書物にまでさかのぼることができると教えられたことを述べている[4]．

すなわち，エディは不死人の国の物語は，昔から中国や日本に流布していて，スウィフトはオランダ人を通じてそれを知り，『ガリバー』の中にとり入れ，一方『和荘兵衛』の作者はそれとはまったく別に，日本に伝わっていた不死人の物語をその作品にとり入れたのであろうと推定している．

この推定の正否はともかく，『ガリバー』第三編のストラルドブラグと『和

荘兵衛』の不死国，又『ガリバー』第二編の巨人国と『和荘兵衛』の大人国との間には興味深い類似点が見出される．しかし同時に重要な相違点も存在する．それらの類似点，相違点を明らかにすることによって，『和荘兵衛』の諷刺の特質を検討したい．

I 『和荘兵衛』の概略

『和荘兵衛』は前後編各四巻よりなり，前編は阿波の遊谷子の作で安永三年(1774年)の出版，後編は沢井某の作で安永八年の出版である[5]．

前編四巻の主人公は長崎の唐物商四海屋和荘兵衛で，四十八才で息子に店をまかせ隠居して毎日海で釣をしていたが，ある日舟に乗って釣を楽しんでいるうちに嵐にあって，不死国に漂着する．和荘兵衛はこの国で不老不死になり，又この国の人々と同じく鶴に乗って飛びまわるようになり，この国を去って後はその鶴に乗って珍しい国々を廻る．巻二では万事自由自在の国，従って富裕な国である自在国を訪れる．この国の人々は貧乏の味を知らないために，富のありがたさがわからない．富や楽ばかりを求めることに対する諷刺である．巻三では矯飾国と好古国を訪ねる．矯飾国は「何事にても男女ともただへつらひかざる国」で，人々は昼間は人前で盛装して風流ぶっているが，夜になると家の中でどてらを着ている[6]．好古国はその名の通り，何事も昔のままで新しいことは何もなく，「心安くよき事もあれども，またまはり遠くもどかしき事のみ多」き国である[7]．

『和荘兵衛』前編には各国訪問記の後に，大人国を除いて，「養生」という二頁程度の養生訓がついているが[8]，好古国の「養生」には次のような教訓が述べられている．

> ...むかしの賢人の能所は学ばず，唐土の我儘者くたびれ者の真似をして次第次第に身持放埒に成り，学ばぬ昔よりおとる人多し....何程古の事を覚え，善を知ても，身に行はざれば，むかし嶄沢山に覚えて居ると同じ事にて，大な益はなし．身の養生にも此類の心得違多し....[9]

最後の巻四では和荘兵衛は自暴国と大人国を訪問する．自暴国には「昔より定りたる法といふ事なく，仏法儒道もなく，古を学ぶ事書籍を見る事法度にて，思ひ思ひ得手勝手，指当道理をいうて，畢竟の善悪を知らず．」[10] このように自暴国は好古国と正反対の国で，若者は唐土日本の学問や法や道を，昔のことが今の役に立つものかと批判し，「役に立つ若い者がわるいものを喰ひ悪いもの着て，役に立たぬ年寄に能きもの喰わせ，能きもの着せて，孝行とやら道とやらいふはどうしたことじゃ」と孝行を否定し，自分の国をよい国だと自慢する[11]．しかし若者も年をとると自分の国の，老人を捨てる習慣を嘆き，外国の孝行をうらやむようになる．この国の物語は，目前の道理ばかりを重視していると，将来困るようになることを教え，儒教や仏教の必要性を説いている．

前編の最後に和荘兵衛は大人国を訪ねるが，この国は，冒頭の不死国と共に『ガリバー』と類似関係のある国であるから，後に不死国と共に『ガリバー』と比較しながら論じることにしたい．

後編四巻は前編とは別の作者である沢井某によって書かれ，前編出版の五年後の安永八年（1779年）に出版された．前編の大人国を除くすべての国の訪問記の後についていた「養生」は，後編ではどの国の訪問記にもついていない．主人公は長崎の渡海屋和荘兵衛という名に変っているが前編の主人公，四海屋和荘兵衛と同じ人物として説明されている．前編では不死国漂着以後は不死国で手に入れた鶴に乗って諸国を廻った和荘兵衛は，後編ではある日海に落ちた時に出会った長さ五尺余の亀にまたがって，珍らしい国々を訪問する．前編の鶴は乗物の役割を果すにすぎなかったが，後編の亀は言語を話し，珍しい国々を熟知していて，和荘兵衛を案内したり，諸国の説明をする．

後編も前編と同じく四巻よりなっている．巻一では亀は和荘兵衛を清浄国につれていく．この国は西方十万里余のところにある釈迦如来の国すなわち天竺であるが，この仏の国に来て，和荘兵衛はよい国ではあるが俗人の住む国では

ないと考え，即座に立去る．巻二ではまず長足国を訪ねる．この国の住民は隣国の手長島の住民と助けあって物を獲って生活しているが，神も仏もない未開国で，和荘兵衛は聖賢の道を広める．次に吝奸(リンカン)国に渡る．この国は三千世界の真中にあって，異国住来の旅人の宿る国であるが，土地や五穀が乏しいために国民は大変吝倹である．この国とは正反対の国で，色欲にふけったり文学諸芸にこって，勘当されて外国から逃げてきた人々をかくまうことを楽しみにしている老人のいる，大胆(クイホ)国を和荘兵衛は巻三で訪ねる．次に金銀宝玉国に向う．最後の巻四では亀が珍しい国々――雷鳴国，大食国，猿似国，長耳国，霊亀国など十一の国々――の説明をする．和荘兵衛はその中の女人国に案内を頼み，その国でもてなしを受けているうちに，目が覚めると，相変らず長崎の海で釣をしていた，という夢物語として後編は終っている．前編は夢物語ではなく，和荘兵衛が大人国から鶴に乗って日本に飛び帰ったところで終っている．

後編は前編に比べて一層断片的で，又『ガリバー』と類似性をもつ国は後編中の国々には一国もない．

Ⅱ　大人国と不死国

次に『和荘兵衛』と『ガリバー』に共通の国である，大人国とブロブディンナグ，不死国とラグナグを比べてみよう．

(1)　大人国とブロブディンナグ

和荘兵衛は前編の最後に鶴に乗って大人国に舞い降りるが，彼が最初竹藪と思ったのは麦畑であることがわかる．これはガリバーがブロブディンナグに置き去りにされた時に，その国の麦畑を乾草用の長い草と間違えるのに似ている．この大人国はすべてのものが「唐土天竺に十倍大なる国」である[12]．人間も我々の十倍の大きさがあり，「男女共長の高さ五丈四五尺，六丈猶余，大男には七丈ばかりなるもの」もいる[13]．この点もブロブディンナグでは万物がヨーロッパの十二倍であるのと類似している．又ガリバーと同様に，和荘兵衛も鳥かごに入れられ，鳥のように飼育され，人々の見せ物にされる．

和荘兵衛は大人国を次のように考える．

> ...五風十雨時をたがへず，五穀よく実のり民ゆたかにて，何一つ不足もなき上上国なり．然れども人に道も法もなく，国政の沙汰もなく，儒仏神のをしへは勿論，仁義礼智の名もなく，何もしらぬ無芸国なり(14)．

そのため彼は三間に六間位の机の上に立って，老子，孔子，孟子など聖賢の道や，釈迦の教えを毎日大声で説いて大人達を教え導びこうとする．しかし彼等に相手にされず，犬やオームの芸を見るように面白がられるばかりである．飼主の宏智先生に理由をただすと，道とか法とか聖賢の教えは小人にのみ益のあるものであって，大人には不必要なものであると，次のように教えられる．

> 汝が世界は小きに応じて人の才智も小く，学ばざればしらず，古人の糟粕に非ざれば甘んぜず，法に非ざれば治らず．善に進難く悪に進安し．故に天より聖人といふ世話焼を生みて，うろたへ者共を善所へ導く....教は小人に益有るのみ．法は小人を入る筥なり....汝わづか三千世界の筥の内に遊んで外をしらず．此間様々口を叩け共，此国の者は子供の椀白いふ様にをかしく聞流したり．汝が世界は才智小く悪をする故に，教の法のといふむづかしき事あり．我世界は智大く悪をせぬ故に，仁も義も礼も法も用る所なければ，教もいらず(15)．

そして最後に次のようにさとされ，恥じて日本に帰るところで前編は終っている．

> 必々汝らも此小ぽけな形で，えもしれぬ鼻の先の小い智恵自慢して，悪戯悪工せずとも，釈迦や孔子のいふ通り，おとなしう守って居て，一生心よく安楽にせよ(16)．

前述のように前編に登場する六国の中で，この大人国の項にのみ「養生」がついていないが，上に引用した宏智先生の言葉がその役割を果している．

身体の大きさが道徳的偉大さと一致する点は，『ガリバー』のブロブディンナグと同じである．しかし巨人達の主人公に対する態度には大きな違いがある．大人国の住民は日本唐天竺のことを噂に聞いており，又宏智先生は噂以上

によく知っていて，上述のように小人達に対する理解ある忠告を和荘兵衛に述べる．これに対して，ブロブディンナグの住民は自国以外の国の存在など全く知らず，彼等の王はガリバーとの問答によって，ヨーロッパの腐敗した状態を聞き出した後に次のように結論する．

> ...by what I have gathered from your own relation, and the answers I have with much pains wringled and extorted from you, I cannot but conclude the bulk of your natives to be the most pernicious race of little odious vermin that nature ever suffered to crawl upon the surface of the earth.(17)

両者の間には，相手の存在を理解している者と，説明を聞いても実際には理解できない者との相違がある．宏智先生の言葉は小人を充分理解した上での同情あふれる忠告であるが，ブロブディンナグの王の言葉は小人の存在そのものさえ信じられない人の言葉である．王は身体の大きさに比例する高い道徳的立場から，理性をもった人間とは考えられないほど小さな身体の，そして又その小さな身体に比例して腐敗した，小人の社会を鋭く批判する．一方大人国の宏智先生は小人のことを何もかも知りぬいていて，彼等を充分理解した上で，彼等より少し高い立場に立って，自分より劣る者に対して，同情しながら教えさとしている．この相違から，一方は人間をつき離して冷静に眺めた鋭い諷刺になり，他方は単なる教訓に終っている．

ブロブディンナグ旅行記に於ける諷刺の方法の一つは，ガリバーの愛国心にあふれたイギリス社会の説明を聞いて疑問点を問いただし，真実を知ろうとする巨人国の王と，それに答えるガリバーとの問答である．ガリバーの愛国心は彼にあるがままのイギリス社会の状態を王に語ることを妨げ，彼は都合の悪い点は隠そうとするが，王は彼の話の矛盾点を鋭く突くことによって真相を見抜く．しかしガリバーは最後まで王の偉大さを認めようとせず，逆に王に対する批判さえしている．これに対して，『和荘兵衛』の大人国の物語は宏智先生が唐土日本のことをよく知っていて，教訓を与えるだけのいわば一方通行であ

る．そしてその教訓は唐土や日本の聖人賢者の説く教訓と変りがなく，宏智先生が身の丈五・六丈の大人である必要は感じられない．又和荘兵衛はその教訓をただありがたく聞くだけで，『ガリバー』に見られる問答の面白さはない．

宏智先生の教えの中にある，法とか教えは小人には必要であるが，大人には不必要であるという考えは，『ガリバー』にも見られる．すなわち，複雑な制度組織は人間の不完全さのゆえに必要であるという思想が，『ガリバー』の第二編ブロブディンナグと，第四編フイヌムの国への旅行記に見られる．ブロブディンナグの王はガリバーの説明するイギリスの制度組織を理解するのに困難を見出し，数々の鋭い質問によってようやく腐敗した実情を知り，次のような感想を述べる．

> I observe among you some lines of an institution, which in its original might have been tolerable, but these half erased, and the rest wholly blurred and blotted by corruptions.(18)

ブロブディンナグの国民は身体の大きさに比例して道徳的にもすぐれているのでこのような腐敗はなく，従って制度組織も簡単なもので充分である．彼等の学問は，倫理学，歴史学，詩学，数学のみで，法律は簡単平明である．

『ガリバー』第四編のフイヌムの国（馬の国）におけるガリバーの主人である馬も，ブロブディンナグの王と同じように，ガリバーとの対談の後に，ヨーロッパの国々には制度組織が必要である理由を理解して，次のように批評する．

> That our institutions of government and law were plainly owing to our gross defects in reason, and by consequence, in virtue ; because reason alone is sufficient to govern a rational creature.(19)

この国の支配者である馬（フイヌム）は完全な理性を持っているので，すべての問題をその理性によって解決する．従って彼等は制度組織をほとんど必要としない．

『ガリバー』第一，三編はヨーロッパの国々の一種の戯画であるから，国民はヨーロッパの諸国民と同じ道徳的水準にある．これらの国々，ブロブディンナグ，フイヌムの国の順に，それらの国民の道徳的水準は高くなっている．それに比例して，それらの国々の制度組織は次第に簡単になっており，フイヌムの国にはほとんど制度が存在しない．又制度組織の腐敗堕落は，それらの複雑な国ほど起りやすく，フイヌムの国にはまったく起り得ない．

以上のように，人間の不完全さのために，教えや，法や，制度組織が必要であり，人間はそれらを守り，腐敗させないようにして，生きていかねばならないという思想は，『ガリバー』と『和荘兵衛』に共通して見られる．

(2) 不死国とラグナグ

和荘兵衛は前編巻一で不死国に漂着し，中国語もオランダ語も通じず困っていると，一人の中国人が現われる．彼は秦の始皇帝の命を受けて不老不死の薬を探し求めるために，唐土からやって来てこの国に住みついてしまった徐福という者で，和荘兵衛は彼の家に落ち着き，又この国に住んだため不老不死になって，二三百年をこの国で徐福と共に暮す．

この国は不老不死国であって，住民すべてが不老不死であり，又上述のように和荘兵衛もこの国に住んだだけで不老不死になる．一方ラグナグでは住民すべてが不死なのではなく，大部分の人々は普通の人間で，全国で千百人位の特別の人々が不死でストラルドブラグ（不死人）と呼ばれる．彼等は生まれながらの不死人で，普通人の中に偶然によって運命的な誕生をする．ストラルドブラグは『和荘兵衛』の不死国の国民と違って，不死ではあるが不老ではなく，普通人と同様に年老いていく．この点が両者の最大の相違点であり，ストラルドブラグの源を考える場合に重要な点である．なぜなら東洋思想においては，『和荘兵衛』の不死国の住民のように，不死は必然的に不老を伴うのが普通であり，「不死」の語は「不老」を冠して「不老不死」という熟語として使われることが多く，又単独に「不死」として使用されるときにも言外に「不老」の意味が含まれている．このように「不死」の意味，内容の相違から考えると，

ストラルドブラグが日本や中国の不死人の思想から影響を受けたのではないかというエディの仮説は，疑問である．むしろギリシヤ神話のティートーノスの物語の方が不老を伴わない不死という点で，ストラルドブラグの源として『和荘兵衛』の不死国よりもずっと可能性があるように思われる．神話辞典によればティートーノスの物語は次の通りである．

> **ティートーノース** Tithonos...エーオースに愛され，...エーオースはゼウスに恋人のために永遠の生命を乞いうけたが，永遠の青春を同時に願うことを忘れたために，彼はしだいに老衰してついに声のみとなったので，エーオースは彼をせみ（蟬）に変じた[20]．

和荘兵衛は不死国を次のように説明する．

> 人に死ぬることなければ産るることもなし．千年二千年の内に，たまたま一人死ことがあれば，其かはりの人又一人生る．されども是は幾万人の中に一人もまれなることにて，皆歳のころ四十ばかりの顔色，男女とも病といふ憂もなく，四季とも雨風序よく，五穀よく実のりゆたかなる国なり[21]．

これに対して，『ガリバー』のストラルドブラグは，偶然生まれるもので，まれに左の眉毛の上に赤いアザのついた子供が生まれることがある．このアザは年と共に色を変えるが，これこそ不死人のしるしである[22]．上に引用したように『和荘兵衛』の不死国人はまったく死なないのではなく，まれに一人死ぬとかわりが生まれ，人口は変らない．一方ストラルドブラグは永久に死ぬことなく，その上，不死である点が普通人と異なるだけで，年老いてゆくことは普通人と同じである．より一層悲劇的なことは彼等の数は少なく，他の大多数の死ぬことのできる普通人にまじって生きていかねばならないことである．ガリバーは不死人の存在をはじめて聞いたとき，彼等を讃美し自分がもし不死人に生まれた場合の抱負を得意になって語るが，実際に彼等の悲惨な状態を見聞するやいなや，永生に対するあこがれと，永生人に対する讃美の念は消え去ってしまう．ストラルドブラグは一般の老人の持つすべての弱点を持つばかりではな

く，決して死なないという恐ろしい見込みから生ずるあらゆる欠点を兼ね備えている．若者の活動力と若さをうらやみ，死んでいく老人に嫉妬する．彼等は永遠に死なないというだけで，老化は絶えず進行し，言語の変化についていけないために言葉も通じなくなり，頭も老化し，ついには廃人同然となり乞食のような生活をしている．

このようなストラルドブラグの悲惨な状態に比べて，不死国人の生活はあらゆる点でめぐまれている．彼等は四十歳から年をとらず，病気にもならず，穀物も実り豊かで，この国は天国のような国である．従って彼等が死を願い，あこがれる理由はストラルドブラグのそれと比較すると，まったく薄弱であり，彼等は一種の遊び気分で自殺を試みたりしている．

> いにしへ天竺唐等より，仏書少々わたりて，極楽の結構なる噂を聞きて，死ぬることをめったむしやうに能事と心得，長生するを悲しがり，千万人の内に不思議に一人死ぬる人があれば，日本で仙人になったやうに羨しがり，夭術とて死ぬる術をならひ，山へ入り谷へ行き，色々と荒行して学べども，とかく死得る人まれなり(23)．

又彼等はフグを食べてその毒にあたって目のまわるのを酒に酔うように喜び，死ぬとはこんなものであろうかと楽しむ．和荘兵衛も長年この国に暮すのに飽きて，死ねないと思うとやたらに死にたくなって，水にとびこんだり，がけからとび降りたりして死のうとするが死ねないので，考え直して不老不死を利用して世界中の珍しい国々を見物してまわろうと，この国の交通機関である鶴に乗ってとび去る．

決して死ねないということから死を切望し，死ぬことのできる人々をうらやむという点は，『ガリバー』と『和荘兵衛』に共通するが，ストラルドブラグの救いのない永遠に続く悲惨な老後の生活と，不死国人の，同じく永遠に続くけれども，不老不死の幸福な生活を対照させるとき，不死への願望，永生の欲望に対する諷刺としての両者の優劣，諷刺の鋭さ，強烈さには格段の相違が見られる．しかも不死国では全国民が不老不死であるため，ごくまれに死ぬ人を

うらやむにすぎないが，これに対してラグナグでは国民の大多数が普通人で，ストラルドブラグは非常に少数であるために，彼等は不死でない多数の普通人を常に身近に眺めながら生活しなければならない．又彼等は不老ではないために，普通人の若者の若さも彼等の嫉妬の対象となる．このことも『ガリバー』と『和荘兵衛』両書の不死国の諷刺の強さに，大きな違いを作り出している原因の一つである．

Ⅲ 『和荘兵衛』の諷刺

ストラルドブラグの住んでいるラグナグは，日本の近くにあって日本と密接な関係を持つ隣国として『ガリバー』第三編に登場する．ガリバーは第三編の航海の最後にラグナグから船で日本に渡りオランダ船でイギリスに帰ろうと考える．

> This island of Luggnagg stands south-eastwards of Japan, about an hundred leagues distant. There is a strict alliance between the Japanese Emperor and the King of Luggnagg, which affords frequent opportunities of sailing from one island to the other.(24)

ラグナグは日本と同盟関係があり，交通の便がある．従って日本はラグナグを含む第三編においてガリバーが訪れる国々と，ヨーロッパの国々とを結ぶ重要な鎖の役目を果している．

このように日本が登場する『ガリバー』第三編に，『和荘兵衛』の作品全体が内容，諷刺の方法の点でよく似た要素をもっている．『和荘兵衛』の中の国々は各々一つの諷刺のためにのみ存在し，それらの国々の間には諷刺の内容の点でまったくつながりがない．小人国（リリパット）のように国全体がイギリスの戯画となるような諷刺方法もなく，又巨人国（ブロブディンナグ）や馬の国（フイヌムの国）に於ける主人公ガリバーと，それらの国々の支配者との対話による諷刺の方法も用いられていない．そして各巻とも全く同じような態度で書かれている．すなわち和荘兵衛は各国を単なる見物人として見てまわる

にすぎず，どの国においても住民の生活の中にとけこむことはない．そして彼は，例えば不死国に二三百年のように，各国に長く滞在するにもかかわらず，各国の描写は短かく，その一面しか述べられていない．『ガリバー』第三編の国々の描写は他の三つの編に比べるとかなり断片的であるが，『和荘兵衛』はそれ以上に断片的で，各国の様子は諷刺の主題に関係のある事柄しか述べられていない．この傾向は後編においては一層強く，巻四では極端に達して，国々の名前と短い説明だけに終っている．

和荘兵衛は単なる見物人，傍観者にすぎず，ガリバーのように訪問国の生活に入りこんで活動することはない．他方訪問国の人々は，日本の存在を噂に聞いていて，充分関心をもっている筈であるのに，日本にほとんど興味を示さず，日本の話を聞きたがらない．ガリバーの訪問する国々ではイギリスの存在はまったく知られていないが，巨人国，馬の国の住民はガリバーの話を聞くことを望み，興味をもって色々の質問をガリバーにあびせる．この問答による諷刺の効果は大きいが，これに対して『和荘兵衛』の諷刺はいわば一方通行であって，高い立場からの批判，教訓が与えられるだけで，それに対する，批判される側からの反撃，反応がない．このような諷刺方法は『ガリバー』第三編のそれに近い．そこではガリバーは傍観者として各国を見物し，住民の生活にとけこむことはほとんどなく，イギリスに帰ることのみを考えて旅行を急いでいる．このことは第三編中の国々が他の編の国々と異って，日本を媒介としてヨーロッパと交通の便があることに起因している．第三編中のガリバーが帰国の手段を持っているのと同様に，和荘兵衛は鶴や亀に乗って自由にどこへでも行くことができる．この点でも『和荘兵衛』は『ガリバー』第三編と類似点を持っている．

『ガリバー』と『和荘兵衛』の叙述方法の最大の相違点は，前者の写実的描写に対して，後者が戯作的誇張文体で書かれていることである．『ガリバー』は出航や帰国の日時や滞在期間を数字で明記し，又各国の所在地を地図によって示すなど，本物の航海記の形式で書かれている．これに対して，『和荘兵衛』

は夢物語の系統を引いており，後編は夢物語として終っている．主人公自身最初の訪問国である不死国で不老不死になり二三百年暮らすし，又各国の間の距離は何万里という現実離れのしたものである．ガリバーは各国へ現実的方法で往来し，その有様は写実的に描写されているが，和荘兵衛は前編では不死国への漂着以外は，不死国の鶴に乗って往来し，後編では珍しい国々を知っており，又人間の言葉を話すことができる亀に案内され各国を訪問する．

写実的描写のもう一つの例として言語に関する問題がある．『和荘兵衛』には言語に対する感覚が欠けている．冒頭の不死国漂着の時には日本語も中国語も通じないで困っていると，中国人である徐福が現われて助かるという場面があるが，その後は言語の話はまったく出てこず，日本語が通ずるかのように書かれている．これとは逆に，ガリバーは新しい国に着くたびにその国の言語を熱心に学びマスターする．又ラグナグのストラルドブラグは年老いて二三百歳にもなると，言語の変動のために不死でない一般の人々と話が通じなくなる．このように『ガリバー』の諷刺効果を高めている要素の一つである，写実的要素を『和荘兵衛』は欠いている．

次に諷刺の対象を比較すると，『和荘兵衛』には『ガリバー』の最大の攻撃目標であるところの，政治に対する諷刺がなく，諷刺よりも教訓的要素が強い．前に引用した大人国の宏智先生の言葉に見られるように，儒教や仏教の教えの立場から，ぜいたくや様々の欲望をいましめる消極的諷刺である．『ガリバー』と『和荘兵衛』の間には根本的な諷刺精神の違いが見られる．すなわち，現実に対する積極的改善の意欲と，現実の矛盾の消極的解決にすぎないあきらめとの違いである．

註

（1） Basil Hall Chamberlain, "A Japanese Gulliver," *Journal of the Asiatic Society of Japan* (London, 1879), Vol. VII. ただし，『和荘兵衛』前編の一部である，不死国と大人国への旅行記のみの英訳．

（2） William A. Eddy, *Gulliver's Travels: A Critical Study* (Prinston U. P.,

1923; Russel & Russel, rev. 1963). なお，『和荘兵衛』の読み方は "Wasōbē" が正しいが，エディはチエンバレンの読み方を踏襲して，"Wasobiyoe" と書いている．

(3) Jonathan Swift, *Gulliver's Travels*, Etc. (Oxford University Press, 1956), p. 256.

(4) William A. Eddy, *op. cit.*, p. 70.

(5) テキストは『滑稽文学全集』第七巻，(文芸書院，東京，大正七年), 177—256頁を用いた．

(6) 『和荘兵衛』, 201—2頁.

(7) 同　　，207頁.

(8) 『和荘兵衛』前編全体が養生訓の形式で書かれている．

(9) 『和荘兵衛』, 211—2頁.

(10) 同　　，213頁.

(11) 同　　，214頁.

(12) 同　　，220頁.

(13) 同　　，221頁.

(14) 同　　，222頁.

(15) 同　　，225頁.

(16) 同.

(17) Jonathan Swift, *op. cit.*, p. 154.

(18) *Ibid.*

(19) *Ibid*, p. 308.

(20) 高津春繁，『ギリシャ・ローマ神話辞典』(岩波書店，1960年).

(21) 『和荘兵衛』, 185頁.

(22) Jonathan Swift, *op. cit.*, p. 246.

(23) 『和荘兵衛』, 188頁.

(24) Jonathan Swift, *op. cit.*, p. 229.